

大震災原発事故からの避難者家族と 子ども支援にどう向き合ってきたか

原 田 勇

(震災避難者支援「厚別・白石子育てクラブ」共同代表)

北海道の臨床教育学

第2号 別刷

2013年7月

大震災原発事故からの避難者家族と子ども支援にどう向き合ってきたか

原田勇（震災避難者支援「厚別・白石子育てクラブ」共同代表）

1はじめに

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖大地震は、空前の規模の地震・津波を起こし、東京電力福島第一原発もこの地震・津波に襲われて想定を超える大惨事を引き起こした。

私はニュースでこの大震災原発事故被害者の状況を知るたびに、「何かしなければ、何ができるか」と模索していた。

知人は、阪神淡路大震災時のボランティア活動の役割を思いだし、石巻に赴き被災した住居下へのドロの搔き出し作業をしてきたという。

そんな中、地元である札幌市厚別区に、福島を中心とした原発事故からの自主避難の人たちが来るらしい、という情報がもたらされ、出来ることなら何でもという思いから被災者への最低限の生活を営むための中古の洗濯機・冷蔵庫・テレビなどの電化製品を搬入するボランティア活動を数名に呼びかけ参加した。

2 避難者と支援者を地域でつなぐ

(1) ボランティア組織の立ち上げ

新聞等によると、原発による放射能汚染から子どもを守るために道内全体では3,220名、その内札幌市に1,435名が避難。これは道内全体の44%に上るという。(朝日新聞朝刊2011/9/10付)

このうち厚別区には213世帯641名が避難していることが前市議による市危機管理対策室への聞き取り調査で分かった。(2011/8/8現在)

故郷を遠く離れた見知らぬ土地の住宅に入居してきたのは、ほとんどが若い母親と子どもたちであった。電化製品を運び上げた周囲に高い建物のない高層階から下を見ると、吸い込まれ

るような恐怖を覚える。こういう環境の中で母親だけでの子育てというのはどれほど心細いものだろうか、との強い印象をもった。

搬入作業が一段落するとすぐ近くにある公園の縁にあるベンチに腰掛け、公園に集まってきた避難してきたと思われる子どもたちをそれとなく見ていると子どもたちはベンチに座ったり、遊具に寄りかかったりして、集団でにぎやかに遊ぶことをしなかった。ただ日光にあたっているように見受けられた。

地元に、「避難者を支援するボランティア組織を作ってくれたら」との避難者による避難者のための組織「みちのく会」本間事務局長(当時)の呼びかけもあり、私たちは地域の現職・退職教師や子育てに関わってきた方々に声をかけ、子ども・被災者に寄り添いながら、子どもたちの学習や生活を支援していく「厚別・白石子育てクラブ」(以下、子育てクラブと記述)を2011年7月に立ち上げた。(正式名称の決定は2011/9)

(2) 避難者の要求・欲求に添って

故郷を遠く離れた見知らぬ土地に避難してきたのは、夫が現地で働いている若い母親と子ども達が多く、住民票を移していない人や短期移住者は小中学校に転入学できないと思っている人もいると聞かされた。

そこで、私たちは札幌市教育委員会と連絡をとると、転入学はできるし、「避難児童生徒修学支援一時金」も給付されることが分かり、そのことを知らせるチラシを避難者住居に配布した。

同時に退職した教員数名が被災者支援・激励コンサート『真夏の朝のトランペット』(松平晃さん)を近くの公園で開催したいので「子育てクラブ」も協力して欲しいとの依頼があり、この成功のためにチラシを避難者住居とその周辺

に配布。さらに近隣の2町内会に回覧板での告知をお願いした。当日は近所の住民を含めおよそ140名が参加して避難者家族を激励することができた。

一方、コンサートに集まった避難者にアンケートを実施した。避難者のニーズを知るためにある。

(3) アンケートの結果

(アンケート以後の聞きとりも含む)

- ・お勉強会をやってほしい
- ・保育園、幼稚園の情報や札幌の教育の現状について知りたい
- ・懇談会をやってほしい
- ・バーベキュー会などをやりたい
- ・長い目で生活や子育ての支援をしてほしい
- ・放射能被爆の調査をしてほしい
- ・乳幼児が圧倒的に多く、無認可保育所については入所しやすくなつたが、幼稚園の支度金が高額で困っている
- ・就学援助が受けられない
- ・福島以外の人との交流が難しい
- ・給食の食材が心配
- ・札幌の行政は、道と比べると顔が見えない。
但し、他の自治体と比べればいいが・・・
- ・学習支援をしてほしい。札幌の学力の状況はどうなのか
- ・働きたい。就職が決まった人もいるが、就職口が少ない
- ・被災者同士、地域の人たちとの関わりを広げたい
- ・障害を抱える子や不登校の子たちへの支援をしてほしい

私たちはアンケートの結果を基に、避難者住居そばの集会所で月1回定期的に、①幼児・小学生を対象に子どもたち同士のふれ合いを重視したお勉強会を開く。②同時間帯に保護者を対象におしゃべり、教育相談会を考慮した「ミニお茶会」を開く、ことを決めた。

2011年度・12年度の主な活動は以下のとおりである。

3 2011・12年度の主な活動

7月10日 避難者宅へ家具・家電運びのボランティアに参加。母親や子どもたちの姿にふれる。「避難児童生徒修学支援一時金」給付の支援活動

7月19日 「厚別・白石子育てクラブ」結成
8月 8日 被災者支援・激励コンサート、午前10~11時『真夏の朝のトランペット』(松平晃さん) 140名参加

8月3日~5日 みちのkids 主催の「夏プロジェクト」(避難してきた子どもたちの学習支援に参加)

9月24日 第一回お勉強会、ミニお茶会。
於:集会所
子ども 14、母親 8、スタッフ 12、計 34名参加

教育相談会。(北海道子どもセンター、保育労組との共催) 母親 1、被相談者 8名

10月10日 (体育の日) 秋の遠足 川下公園。自家用車4台に分乗して現地に行く。スタッフ含め計 20名

10月29日 第2回「子どもふれ合いクラブ」子ども 24、保護者 17、スタッフ 11、計 52名

11月26日 第3回「子どもふれ合いクラブ」子ども 17、(含む幼児 8)、母親 12、スタッフ 14、計 43名

12月17日 第4回「子どもふれ合いクラブ」(クリスマス会) スタッフ 12、出演者 17、計 120名

1月11日 初心者スキー教室。子ども 28、保護者 15、スタッフ 6、スキー指導の小学生 2、計 51名

1月22日 被災者支援藻岩スキー教室。北海道スキー協議会と共に開催。指導者を含め計 52名

2月25日 第5回「子どもふれ合いクラブ」子ども 18、母親 16、スタッフ 14、計 48名

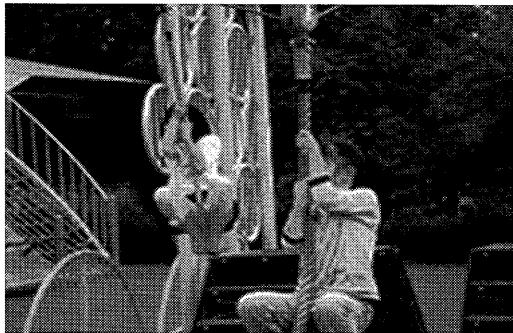
3月25日 第6回「子どもふれ合いクラブ」(進級をお祝いする会) 子ども・保護者22、スタッフ12、計34名
4月21日 第7回「子どもふれ合いクラブとミニお茶会」子ども21、保護者6、スタッフ9、計36名
5月19日 第8回「子どもふれ合いクラブとミニお茶会」子ども9、保護者2、スタッフ8、計19名
6月23日 ピクニック「北海道開拓の村」他の催しとぶつかり中止
7月30日 第9回「子どもふれ合いクラブとミニお茶会」幼児・児童11、保護者4、スタッフ8、計23名
9月22日 秋の遠足 藻岩山(展望台)、さけ科学館 真駒内公園(バス1台借りて実施)子ども・保護者51、スタッフ15、(札幌学院大学学生・教員7)計66名
10月20日 第10回「子どもふれ合いクラブとミニお茶会」子ども8、保護者2、スタッフ11、計21名
11月17日 第11回「子どもふれ合いクラブとミニお茶会」子ども14、保護者3、スタッフ11、計28名
12月22日 クリスマス会、バルーンアーティスト、劇団一揆など 計90名
1月 9日 公園でのスキー教室。子ども11、保護者6(内父親1)、スタッフ6、計23名
1月14日 藻岩山スキー教室。主催北海道スキー協議会。全市の小中学生の避難者対象、子ども(小中学生)45、保護者13、子育てスタッフ4、北海道スキー協議会指導員23、計85名
2月23日 第12回「子どもふれ合いクラブとミニお茶会」子ども11、保護者1、スタッフ9、学生・教員3、計24名

(3) 主な活動の内容

●秋のピクニック (2011/10/10)

10月10日、当日は天候が心配されたが、

スタッフを含め20名が参加した。午後から天候が崩れるとの予報だったので、参加者は車4台に分乗して白石区にある川下公園に出かけた。公園に到着すると荷物は屋内運動場に置き、早速みんなで外に出て遊具広場に行く。



そこには大きな滑り台などの複合遊具やターザンロープなどがあり、子どもたちは遊具に上ったり下りたり、何回も何回もロープにぶら下がったり、鬼ごっこをしたり夢中になって遊んでいた。

その後、すぐ近くにある芝生で覆われた築山に向かうと、どの子も頂上めざして走りだし、上からゴロゴロと転がったり、持って行ったボールを転がしたりけったりと思い切り身体を開放していた。初めは見ていた保護者たちも子どもの喜ぶ姿を見て刺激されたのか、子どもと一緒に遊んだり、新鮮な秋の空気をたっぷり吸って楽しんでいた。

考えてみれば福島では放射能被爆を恐れ、3・11以降で自由に遊ぶことは出来なかつたと思う。ましてや芝生の上を転がることなんてとんでもないことなのだ。

屋内運動場に戻ってから、テーブルを囲みみんなで昼食。昼食後はまた遊び始めた子どもたちを遠目に見ながら保護者の皆さんとの交流をした。その中で「福島の子どもはスキー学習やスケート学習は一切やっていない。だからスキー教室は冬休み中に是非やって欲しい」など様々な要求が出た。

●衣類・スキー用品のバザーとスキー学習 (2011/10~2012/01)

次第に秋が深まってゆくにつれ、厳しい北海道の冬をどう乗り切るかが、支援者・被支援者にとって共通の大きな課題となる。このため、衣類のバザー（無料配布）や支援者から冬用の布団提供の申し出もあり被災者に受け取ってもらったりした。

特に初年度は学校のスキー授業に対応できるように、校区内の小学校校長にスキー授業の援助を依頼。学校はPTA主催のスキーリサイクルを開いてくれた。他団体もスキー用具の支援をした。私たちもスキーの板・ストック・ウエアなどを集め、希望者にプレゼントした。

さらに、3学期のスキー学習に間に合うよう近くの公園で「スキー教室」を開いた。

「スキー教室」は心配して見に来ていた多くの保護者から感謝された。

●ふれ合いクラブ・お勉強会（2011/10/29）

ストーブがつかない！まだひとりも子どももやってこない。「ストーブはつか～な～い、子どもはこ～ない」と歌っていると、隣室の懇談会担当の女性が「つきましたあ？」とやってきて、「ガスの元栓開けましたか？」と。私たち、コンセントは入れたけど、ガスの元栓なんて考えもつかなかつたがめでたく点火した。

ふと外を見ると、ふたり子どもが。しかし、その後、子どもの姿はなく、やってこない。「ふたりかあ、前回勉強ばっかりだったしねえ」と、ふたりきりかもと覚悟を決めようしたら、名簿に名前を書いてもらうのに順番待ちができた。前回の人数くらいと机を用意していたが、たりずにあわてて追加。子どもたちは前回の倍の24人も集まった。幼児は、一つの机を3人で使う。部屋がこどもたちでいっぱいって、すごいことだ。

勉強会が始まった。子どもたちは、言われなくても持ってきたドリルをひろげ、すぐ取りか

かっている。なんて自主性のある子どもたちばかりか、なんて家庭での育て方がしっかりとしているのかと驚いてしまう。幼児は、ぬり絵をしたり、お絵かきをしたり、またたく間に勉強時間が終了。

勉強の時と違った目の輝き

子どもたちの手で机やいすを片付け、ゲームの広場をつくった。幼児から中学生まで、道具を使わず簡単にできる「ぐんか」ゲームを説明。すぐ理解したらしくゲームを始めることができた。全員起立。リーダーの「ぐんか、ぐんか、ぐんか」の声に合わせ両手をあげ、グー、チョキ、パーのどれかを最後に出す。出した者が、リーダーと一緒になら負けで、すわる。「わーっ」とか「えーっ」とか言ってすわっていた。リーダーは最後に残った子と交代。新リーダーは、名前、学年をみんなに発表し、ゲームを始める。4、5回やったがリーダーは全員ちがい、交流が深まったようだ。次のゲームは全員手をつないで円をつくり、鬼を決めて、となりの子の手に500円玉を渡していく。最後までいったら鬼がだれが持ってるかをてる。1、2回目は失敗。3回目、鬼が見事あててびっくり。これでゲームはおしまい。勉強の時と違った目の輝きに、ひとりで遊ぶよりたくさんで遊んだ方が、ぐーんと楽しんだと実感してくれたような気がした。

今日の参加者は合計52名。子ども24名、保護者17名、スタッフ11名。

●クリスマス会（2011/12/17）

事前の申し込み段階で集会所に入りきるのかと心配する人数。スタッフ12名、出演者17名を含めて120名の参加。9時に集まった「子育てクラブ」の面々は受け付け開始までの30分間が勝負とばかり猛然と準備にとりかかる。9時半近くになると実行委員の子どもとお母さんたちが集まってきて、作ってきた飾りを貼り付けていく。壁がぐんぐん華やかに変わってきた。貼り終わったところで、実行委員のお母さんたちには受付と参加する子どもたちの手作り飾りの貼

り付けに、そして子どもたちは司会進行と受け持ったゲームの打ち合わせ。多くの人であふれるような部屋の様子に「子どもたちのイメージ通りにはゲームはできないぞ。どうする!」と悩んでいるうちにスタート。



ボランティアで参加してくださった大淵さんのハーモニカ演奏。藤田さんがお孫さんを助手にしてのマジックショー。手拍子がおこったり、歓声が上がったりと盛り上がってきた。その後子どもたちが進めるゲーム。

ぶつけ本番にほぼ等しい実行委員の子どもたちはよくがんばった。(1年生から5年生の5人)。次はこれもボランティアの「劇団一揆」が力強く南中ソーランを踊ってくれる。最後は親たちと子どもたちの「どっこいしょ、どっこいしょ」「ソーラン、ソーラン」の掛け合いと踊り隊の子どもと一揆の踊りが一体となって、集会場が熱気に包まれた。帰りにはうれしいお土産が赤い衣装のサンタさんから子どもたち一人ひとりに手渡され、提供された支援物資は必要としている方が喜んで持ち帰っていかれた。

“避難者とともに企画を”という「子育てクラブ」の思いが、3名の親と5名の子どもの実行委員の活躍で生かされた会になったと思う。

●秋の遠足「藻岩山・真駒内サケ科学館」 (2012/09/22)

すっきり晴れた青空の下、避難者の家族や学生ボランティア、クラブ会員合わせて66名が

参加した。

大型バス1台に乗り出発。藻岩山には途中からミニケーブルカーに乗って頂上の展望台に行くと親子でお腹一杯きれいな空気を吸い、今住んでいる札幌市内を展望した。その後広大な真駒内公園の一角にある「さけ科学館」を見学。水槽や池で泳いでいるサケやイトウの大きさに、「うわー、おっきい」と声を上げていた。

広い芝生の上に広がってお弁当を食べた後は、幼児・小学生と学生ボランティアが一緒になってゲームをする。



傍で見守っていた若いお母さんは、「こんな芝生の上で子どもが駆け回るのは、ほんとに久しぶり。私たちものんびりできてよかったです」と語っていた。

●藻岩山スキー教室（2013/01/14）

北海道勤労者スキー協議会による震災被災者支援スキー学校が開催された。昨年に続いて2回目である。

「子育てクラブ」は、運営スタッフとして協力した。今年は、学校でのスキー授業に生かせるようにと対象を小中学生に絞り、札幌市内全域の被災者に参加を呼びかけた。参加者は総勢49名。

ベテラン指導員による専門的な技術指導。バス代、指導料、リフト代だけでなく昼食までスキー協が負担して、子どもたちは全て無料である。



朝8時にスキー協がチャーターしたバスが厚別を出発。途中真駒内駅前で待ち合わせた参加者を乗せ藻岩市民スキー場へ。現地に直接集合したお友だちもいる。

20人の指導員の皆さんによる子どもたちの実態に合わせた丁寧な指導が始まった。

この日、スキー練習中にお父さんが福島に帰ってしまうことになっていたSちゃんは、お父さんとお別れする寂しさから出発間際にバスを降りてしまうというハプニングも。でも、その後空港に向かうまでの時間を割いてお父さんが藻岩山まで連れてきてくれて、無事に明るい表情でみんなに合流した。

一日がかりでようやくカニさん歩きを覚え、斜面を登れるようになった子どもも15回ほどもリフトに乗って思いっきりスキーを楽しんだ子も。それぞれステップアップして、3学期のスキー授業には自信をもって参加してくれるのではないだろうか。

雪質にも恵まれ、一人の怪我もない楽しいスキー学校であった。

(「会」のブログより主旨を転載。「秋のピクニック」「秋の遠足」以外は、「会」の世話人執筆)

4 支援者のネットワークを拡げる

(1) 私たちの「会」の特徴

避難者の居住地域に避難者と支援者をつな

ぐボランティア組織が大切との思いで、7月に「会」を結成した。札幌市内にも支援活動を行っている団体は多くあるが、避難者の居住地域での支援活動はほとんどないと思われる。

避難者にとっては、他の地域まで移動するとなると交通費がかかるし、乳幼児がいると一層大変だ。避難者の皆さんのがんばり集会場に行き、子どもたちや保護者と交流することで、顔なじみになり、子どもたちの名前も知り、互いに親しみを感じることができる。

また、月に1回継続的に活動していることだ。原発の放射能汚染の不安から避難してきた子どもや保護者が安心・安全に生活するには月1回のふれ合いではとても少ないだろう。しかし、そこに行けば悩みも聞いてくれるし、勉強もできる。友達もできるし、身体も自由に動かせる、というのはとても大切ではなかろうかと考えている。

さらに、子どもたちの主体性を重んじていることだ。例えば、「クリスマス会」「卒業進級を祝う会」では、子ども・保護者・私たちスタッフで合同の実行委員会を作り子どもの意見感情を大事にしている。

この活動を通して、私たち自身の経験を越えた被災者の実態に寄り添いながら、原発とは何か、震災とは何か、復旧・復興とは何か、教育とは何か、人権とは何かなどについて避難者と共に学びを深めしていく視点も大切にしたいと考えている。

(2) 賛助会員・学生ボランティアの参加

今まで私たちは、「みちのく会」「みちのくkids」(教育大の学生中心のボランティア組織)「むすびば」「北海道子どもセンター」「北海道退職教員の会」「保育労組」「北海道勤労者スキー協会」や地域の子育て団体、現職の教員など様々な団体・個人とつながってきた。また、「クリスマス会」など大きな催しの時は、「劇団一揆」などの援助を受けてきた。しかし活動費はほとんど私たちのポケットマネーで賄ってきた。

そこで、支援活動をしたいが場所が遠くて行けない、忙しくて参加できないなどと思われる人に、「支援活動を支える賛助会員」のおねがい（1口 1,000 円）をした。

結果、2012年度は 73 名の方が応じてくれ資金援助を受けた。

札幌学院大学の学生・教員とつながることができた。若い学生が来ると子どもたちは喜び、元気が出てくるものだ。「秋の遠足」では芝生の上を学生と一緒に走り回ったり、ゲームをして楽しんでいた。2012年の秋からは、大学の教員にアドバイスを受けながら学生も継続的に参加している。

5 避難者の葛藤

2011年7月14日付けの北海道新聞は次のように報じた。

「東日本大震災で福島県などから避難してきた被災者が住む札幌市厚別区の雇用促進住宅で、汚物か泥のようなものが通路にまかれ、各世帯の鍵穴にも詰められるなどの被害があったことが14日、分かった。報を受けた札幌厚別署は、悪質ないやがらせの可能性があるとみて、パトロールを強化している。」

福島県から避難してきた Aさんは、「避難区域以外に住んでいたが、小学生と中学生の 2人の子どもにはマスクをさせて通学させた。周りからは変な目で見られたようだ。車を徹底的に洗ったり、家の窓には目張りをしたりした。それでも不安なので札幌に避難。夫は現地の仕事をやめて遅れて札幌に来た。自分のブログには『ふるさとを捨てた卑怯者』、『国賊』など様々な非難の言葉が書かれた。夫のブログも同じだ。それでも私たちは幸せだ。家族で避難できだし、福島第二原発で働いていた祖父や祖母は避難を理解してくれた。」

避難してきた人の中には兄弟や祖父母、親戚、近所の人に後ろ指を刺され、逃げるようにここに来た人がいるのです」と話された。

同じ福島県から避難してきた Bさんは、2人の高校生と避難してきた。しかしそれから本人は胃潰瘍になる。下の高校生の娘さんは摂食障害になり高校も休みがち。仕事に就くためパソコンの研修を受けたり、被災者支援 NPO 法人に勤めたりしながら現在は内職をして自立を目指している。

一方、障害を持っている成人の息子さんと 2人で宮城県から避難してきた Cさんは、「自宅は災害を受けたが何も保障されない。壊れた家で住むのは大変だ。しかし夫はそれでもそこに住むというので 2人で札幌に来た。今、息子を 2箇所の施設に連れて行っている」と話してくれた。「藻岩山スキー教室」には、介護ボランティアの方を頼み、息子さんはそり遊びを楽しんでいた。

2012年の12月「クリスマス会」頃から避難者住居の代表を務めている Aさんは、避難者住居や住人を特定するような報告や記事・報道をするのを止めるよう、神経を使うようになってきた。福島などにとどまっている人と避難者を分断させない。地域からも孤立させないためであろう。

それほど複雑なものを背負わされた避難者である、と思う。

6 災害避難地を訪ねて

かつてない被害と困難を住民に負わせた災害地の様子を自分の目で見てみようと思い、2012年の5月、私は宮城県名取市閑上地区と石巻市を訪ねた。当初は原発被害地福島県南相馬市を訪れる予定であったが、現地の知人と連絡調整がつかず、宮城県にしたのである。

仙台市にはかつて私の小学校時代の教えた子（津田ひとみさん）が製薬会社に勤め、石巻を中心に病院や薬局に医薬品を届けていた。その子たちとは 4 年に一度くらいの割合でクラス会を開いていたので、津田さんとは震災の後も連絡を取り合っていた。そこで彼女に案内してもらうことになった。

JR 仙石線は震災のため不通なので高速バスで石巻まで行き、石巻市内は津田さんの車に乗り被災地を見て回った。ほとんどの建物は崩壊し、車は建物に突っ込み、所々に大きな水溜りができている。

海岸近くにあった石巻市立病院は外観だけをかろうじて残しているだけであった。

津波の凄まじさを見せつけられた。

津田さんは後に、「3・11の記憶」の体験記を送ってきた。その一部を紹介する。

「高速バスは使えない」と警察から聞いていたので、車で内陸側の山を越えるルートで石巻に入った。10分も走れば目の前はどんどんヘドロでぬかるみはじめ、引いていない海水で浸水している街中に突入することになった。

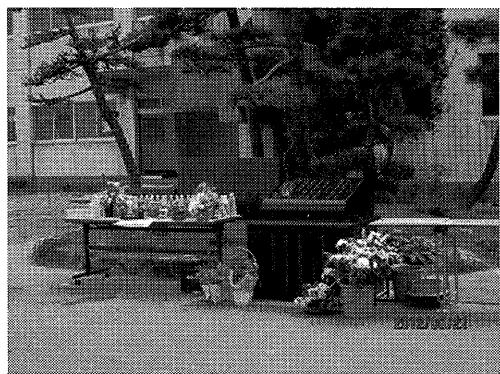
車のマフラーが海水に浸かるギリギリのところまで進み、エンジンがどうにかなったらどうしようかなどと考えながらも、進むしかなかった。映画のセットの中にいるようで、外は薄暗く、ガスのような匂いが立ち込め、ところどころ煙のようなものが上がっているのがみえた。車では先に進めないため、適当なところへ車をとめ、長靴に履き替えて取引先の病院へ向かった。地獄だと思った。道路を塞ぐ漁船、ぐちゃぐちゃになった車や建物、家々が積み重なり、道を塞ぐため中々前に進めない。医療機関を回ったが、診察室もなにもかもがめちゃくちゃ、近隣住宅もだ。

私の仕事については、大体の目的は果たすことができたので、これからは支援する側として継続していくことにした。通りすがりで困っている人がいれば、お年寄りを診療所から避難所へ送ってあげたり、物資を分けたり、情報を共有したり、医薬品の供給、物資の提供を行なうが安否の確認が取れない医師を探すこともした。朝は車に積めるだけの水をポリタンクに入れ、タオルや非常食、自宅にあるものでもなんでも持ち、被災者には絶対によくなるからとにかく今は体を壊さずに持ちこたえてほしいという想いで動き回った。

毎日が、無我夢中で、細かいことはあまり覚えていないが、毎日泣きながら過ごしていたなということは今でも覚えている。沢山の遺体も見た。

石巻に来るのが辛いとは思わなかった。きっと私を待っている人たちがいてくれたことが支えになつたと思っている」。

石巻に行く前日は仙台空港近くの名取市閑上に行つた。路線バスに乗り閑上小学校、中学校に行き、周辺を歩いてみた。一部の建物と建物の土台のみが残っている広大な荒地。遠くには、瓦礫の山と廃車の山。殺伐とした震災の風景を見て深い溜息をついた。



14人の生徒の命を奪われた閑上中学校に行ってみた。玄関前には子どもたちの慰霊の碑があり飲み物、花、寄せ書きなどたくさんの供え物があった。校舎は廃墟となっていた。

学校に行く道の角には「閑上の記憶」の家があり、ボランティアの方から当時の体験談を聞いた。今回の宮城行きは、震災の衝撃とボランティア活動への励みを与えられた旅となつた。

7 子どもの生存・発達を支える支援

臨床教育学を提唱している田中孝彦は、アメリカの精神科医ジュディス・L・ハーマンの『心的外傷と回復』を取り上げて、この本は「傷ついた人々を支える援助的実践の模索に基づいて、

人間の生存・発達を支える援助の原則を提示したものの中一つと受けとめてきました」と述べている。彼は、『心的外傷と回復』について次のようにわかりやすく説いている。

「『心的外傷』を負った人々は、『無力感』に支配され、周囲の人々から理解されておらず孤立していると感じて『孤立無援』にさいなまれながら、少しでも自分を受けとめてくれそうな他者を求め、他者に『しがみつく』場合がしばしばある。だが、その『無力感』『孤立無援』と同じ重さで受けとめられる他者はめったにいないので、『傷』を負った人々は期待を裏切られて、しがみつこうとした相手を『攻撃』してしまうことがしばしばある。そして、『しがみつき』と『攻撃』の頻繁で複雑な交替を繰り返すことが多い。(略) それは、今の日本の子どもたちに見られるさまざまな不安定な姿、『攻撃』と『依存』とを複雑に交替させる姿を説明しているように読みます」(1)。

震災原発事故から2年過ぎた現在、避難してきた子どもたちにも「心的外傷」(トラウマ)が見られるようになってきたと思われる。

私たちは月1回の催し後の反省会でも子どものようすを交流するが、どうしたら彼らを回復させることができるのか、私たちはただ腕を組み、悩むことが多い。

8 子ども・避難者の変容

先に述べたように多くの支援者とつながりながら、私たちは月1回のボランティア活動をしてきた。

「秋のピクニック」では子どもたちは遊具に上ったり下りたり、何回も何回もロープにぶら下がったり、鬼ごっこをしたり夢中になって遊んでいた。芝生に覆われた築山では上からゴロゴロと転がったり、ボールをけったりと思い切り身体を開放していた。

保護者たちも子どもと一緒に遊び、新鮮な秋の空気をいっぱい吸って楽しんだ。

「秋の遠足」ではお弁当を食べた後、広い芝生の上で幼児・小学生と学生ボランティアが一緒に走り回っていた。傍で見守っていた若いお母さんは、「子どもが駆け回るのは、ほんとに久しぶり。私たちものんびりできてよかったです」と語った。

一方、子どもたちが実行委員になり企画した「進級をお祝う会」では、実行委員の1人であるYちゃんは、「前の学校の校歌を演奏します」と言って鍵盤ハーモニカで演奏した。やはり、福島の学校、友達と一緒に数年間過ごしてきた学校は忘れないのだろう。同時に福島の学校の校歌を演奏することで自らを励ましているのか。聞いていて愛おしさを感じた。子どもたちは葛藤しているのだ。

演奏を聴いていたお母さんたちは実行委員からインタビューを受け、「大変な中、私たちを支えていただき、本当に助かっています」「これからも子どもたちを支えていただけるようよろしくお願いします」と話された。

最後に参加者全員で「アンパンマンのマーチ」を歌い、互いを励ました。「アンパンマンのマーチ」は被災した子どもたちを励まし続けた曲だ。

「ラジオなどで流される音楽は、被災地を応援する内容のものが圧倒的に多くなっている。心理的なストレスを抱える子どもも多く、『アンパンマンのマーチ』などのアニメソング、前向きに生きることが歌詞に込められた(曲)が多く集まっている」(朝日新聞2011/4/8付)

歌を歌ったあと、子どもたちの顔は心なしか輝いて見えた。

今年(2013/1/4)実施した「藻岩山スキー教室」に参加してくれた子どもは次のような作文を書いてくれた。

「わたしがおしえてもらったことは、ハの字でうまくすべることです。さいしょはハの字でうまくすべったりできませんでした。でも先生たちが楽しくおしえてくれたので、うまくできるようになりました。

リフトは1人のりと2人のりと3人のりがありました。1人のりはすこしこわかったけれど、

2人のりと3人のりはすごく楽しかったです。こんどふくしまからお父さんがくるので、うまくなつたところをこうえんで見せてあげたいです」

その子の母親も手紙を添えてくれた。

「子どもがバスから降りて、開口一番『すごく楽しかった!』の声を聞き、親としても大変嬉しく、有り難く思いました。・・・実は福島にいたときは、子どもが生まれる前、猪苗代のスキ一場で修学旅行生や子どもたちにスキーを教えておりました。滑れるようになった時のキラキラした顔を見るのは教える者の特権と思っていました。そんな顔をして我が子が帰ってきましたので、先生たちにはとても感謝致しますと共に、その頃のことが思い出されます」。

9 支援することの難しさと課題

今年（2013年）2月の「子育てクラブ」終了後の反省会で、「最近子どもたちに少しダレが見られるようだが」との話が出た。学習中の無駄話が増えた、態度もダラッとして意欲が見られない、ゲームも大儀そうに取り組んでいる、一部粗暴な言動が見られるなどである。

児童精神科医の清水将之は次のように述べている。「子どものこころの不調は、おとなたちがやっと一息ついて、復興に向けて歩みを始めるころを見定めたかのように、噴出することが多い。あるいは長い時間表面に出なかった心身症状が、数年後に思いがけない形で表出する可能性もある」(2)。

「トラウマ反応」であろう。「トラウマ反応」は大人にも表出する。

私たちはこれから子ども・避難者とどう向き合えばよいのか。

児童精神科医の井出浩は、「当たり前のことを、少しだけ丁寧にして、見守ることが大切だと説き、次のように述べている。「子どもの心の回復を求めるには、基本的信頼の回復が必要である。そのため必要なことは、安心・安全であり受け容れてもらえる感覚である。それらを通

して子どもたちが自らの存在価値を確信できることを目指す。それが子どもの支援である。災害のストレスへの対処に終始するのではなく、子どもの心が健康に育ち続けることをを目指すのが、災害後の子どもへの支援であり、それは、子どもの健康な成長のために普段から求められているかかわりを、より丁寧にしたものだと考えている」(3)。

私たちは互いに子どもの実態を出し合いながら、今までより「少しだけ丁寧に」見守っていきたいと考えている。

2013年度の活動の基本を決めるにあたって、再度アンケートを取り、避難者の声を聞くことが必要ではないかとの意見が出され、私たちは、「避難者と支援者の交流会」（飲み会）に出かけた。そこでは具体的な要求を聞くことはできなかつたが、相互に交流しながら避難者の今の思いは掴むことができた。

「原発事故子ども・被災者支援法」（正式名称：東京電力原子力事故により被災した子どもをはじめとする住民等の生活を守り支えるための被災者の生活支援等に関する施策の推進に関する法律）が2012年6月21日に成立した(4)。

一定の線量以上の放射線被曝が予想される「支援対象地域」からの避難、居住、帰還といった選択を、被災者が自らの意思によって行うことができるよう、国が責任をもって支援しなければならないと定めた法律である。

私たちが支援している避難者は、「避難指示区域外」のいわゆる「自主避難者」である。

多くの自主避難者は、未だに『ふるさとを捨てた卑怯者』と現地にとどまつた人々から思われているようである。「原発事故子ども・被災者支援法」は、「避難する権利」を認めている。「避難する権利」とは、避難を選択した場合は、必要な情報や経済的、社会的支援を受ける権利のことである。つい最近、マスコミは、「福島県白河市から札幌市に避難した母子に対し、東電側が、同区域から避難した人と同等の賠償金を支払う内容の和解が成立した」と報道した。

（2013/4/18付朝日新聞）

この報道内容は、「避難する権利」を認めた具体例であろう。自主避難者とどまつた人を分断させないことを願い、支援活動を進めていきたいと考えている。

私たちの活動の基本的スタンスは、「教師として、母親として子育てに関わってきた経験や専門性を生かして、子ども・被災者に寄り添いながら、子どもたちの学習や生活を支援し、また被災者が共通して抱えている子育て上の悩みを少しでも軽減できるような支援をしていく。その中で明らかになってくる諸要求については、関係諸団体に情報を提供し連携しながら問題解決への橋渡しを行う。支援はあくまでも押し売りではなく被災者のニーズに応じて行う。

「『与える』『与えられる』関係ではなく、人と人のつながりを重視した活動をすすめる」である。

河崎健一郎共著 『避難する権利、それぞれの選択』岩波書店、2012

日本学術会議日本大震災対策委員会

『東日本大震災とその後の原発事故の影響から子どもを守るために』日本学術会議、2011

付記

個別の事例に関しては、特定されることをさけ、プライバシーに配慮して一定の事実の加工を加えていることをお断りしておきます。

引用文献

- (1)田中孝彦著 『子ども理解と自己理解』
かもがわ出版、2012、p52-53
- (2)清水将之編・著 『災害と子どものこころ』
集英社、2012、 p4-5
- (3)井出浩「親は子どもにどう接すればよいか」
清水将之編・著 『災害と子どものこころ』
集英社、2012、 p108-109
- (4) 被災者や多くの弁護士たちが中心となり、
全ての党派が共同で提案し、全ての国會議員
が賛成して成立した法律

参考文献

- 児玉龍彦・金子勝共著『放射能から子どもの
未来を守る』ディスカバー携書、2012
田中孝彦編 『創造現場の臨床教育学』
明石書店、2008

